

生涯音楽学習としてのポピュラー音楽活動と音楽科教育

——音楽教育に求められるもの——

Popular Music Activity in Lifelong Music Learning and School Music Education:
What Learning Contents Amateur Musicians Wish for in Music Education

高橋 範行

1. はじめに

成長型社会から成熟型社会への転換が指摘されてから久しい。前世紀を社会の量的拡大によってもたらされる豊かさを求めてきた時代とすれば、今世紀では社会の質的向上による精神的な豊かさが求められていると言えよう。このような世界的な社会の有り様の変化は日本の多くの政策にも大きな影響を及ぼしており、教育もその例外ではない。1990年に制定された「生涯学習の進行のための施策の推進体制等の整備に関する法律（生涯学習振興法）」によって、それまで学校制度を中心に教育が展開されてきた日本においても、学校教育と社会教育の境目をなくし、より包括的な教育・学習社会環境の構築を目指すことで、生涯にわたる「学び」から心の豊かさを高めるという、生涯学習の方向性が公的に示されたといえる。このような学習社会の中で、学校教育は意識的な学びのスタート地点となる。学びのための基盤となる知識・技能を提供する場として、生涯にわたって続いていく学習の軸上に義務教育を位置付けることができよう。

音楽については、1994年に「音楽文化の振興のための学習環境の整備等に関する法律（音楽文化・教育振興法）」が制定され、学校教育も含めた形での日本の生涯音楽学習の環境整備のための基盤が整った。しかしながら、多くの研究者が指摘するように、この音楽文化・教育進行法によっ

て、実際の音楽科教育が生涯音楽学習の出発点として質的な変化を見せたとは言い難い（高萩, 2000; 高萩・中嶋, 2000; 丸林, 1999; 玉木, 2009）。

音楽科教育において生涯学習の視点がなかなか浸透しない理由のひとつは、もともと音楽が余暇活動の筆頭となっていた事実と無縁ではないように思われる。幼少時から既に稽古事として独立した音楽学習が学校外で実践されるという状況は、必然的に学校内の音楽学習とその後の余暇としての音楽学習との連続性を弱め、結果として音楽科教育は生涯音楽学習との接点の見出しという点で遅れをとったものと考えられる。

しかし、そのような外的要因のみが今日の音楽科教育における生涯学習概念の希薄化を生み出した訳ではあるまい。当然ながら、音楽科教育の内容そのものにも問題は存在していると考えられる。例えば、「学校音楽」という音楽科教育で扱われる音楽を指す言葉の存在に象徴されるように、学校内外に存在する音楽の間の乖離問題についてはこれまで数多の指摘がなされてきた。つまり、音楽科教育で扱う音楽、所謂クラシック音楽や文部省唱歌を中心とした教材群と、子どもたちが日常的に学校外で嗜好する音楽、所謂ポピュラー音楽は、あまりにもその様式的な特徴が異なっているのである。このような現状が必然的に音楽科教育とそれを終えた多くの子どもたちが実践する音楽活動との間の断続を生み出しているひとつの要因になっているものと推測される。

この状況が、単純に学校教育で用いる教材を子どもたちの音楽的嗜好に合わせたものに変更すれば改善されるという類のものでないことは明白であろう。生涯学習を見据えた上で、教科としての目標に関する議論はもちろんのこと、もつべき体験や授けるべき基礎的な知識・技能など、理念から内容と指導方法にわたるあらゆる面について検討が必要となるのは言うまでもない。

これらの議論や検討は学習者の視点を抜きに進められるべきではない。では、生涯学習という枠組みの中で音楽の学習者は音楽科教育に何を望むのであろうか。法岡 (1995) はこのような問題意識から、アマチュア合唱活動に参加している成人を対象に、その音楽科教育との関連を探っている。そこでは、依然として学校外での音楽教育が知識や技術の習得に大きく貢献している状況が判明している。しかし、一方で音楽科教育によく適合できた層にとっては、学校の音楽授業によって音楽への興味が育ったという、まさに教科としての目標に沿った形で音楽科教育が一定の役割を果たしていることも明らかになった。

ただし、この調査で対象とされた者が全て「合唱」という活動に携わっている人々であったことは留意しておく必要がある。そもそも「合唱」は音楽科教育では主要な活動のひとつである。そのため、授業内の「合唱」経験がその後の生涯音楽学習における「合唱」の選択と音楽科教育の好意的な受容の契機となっていることは十分に考えられる。

さらに、「合唱」は音楽科教育の中心となっている「フォーマル」な学習形態をとっている。「フォーマルな学習」とは、目標と手順の明快性が明確にあらかじめ定義される伝統的な教育環境の中で起こる学習である (Wright & Kanellopoulos, 2010)。その代表的なものが、クラシック音楽の学習であろう。無駄のない完璧な作品構造とその表現を追求することを基本とするクラシック音楽では、その学習や教授についても合理的で無駄のない方法が研究され蓄積されており、音楽科教育も大きくその恩恵に与っていると見えよう。一般

的に合唱は作曲者によって入念に構築された作品をもとに歌唱者が音楽表現を生み出していくプロセスであり、それはオーケストラの歌版とでも呼ぶべき活動である。つまり、楽譜を元に音楽を構成していく過程を中心としている。また、ソリストや指揮者としてプロの音楽家を招き、指導を仰ぐ場合も多い。このような点において、「合唱」はその学習や実践方法でクラシック音楽に代表される「フォーマル」な形態が中心となっているとみなすことができる。

しかし、余暇活動としてクラシック音楽に代表されるような「フォーマル」な性格が色濃い音楽ばかりが選択されるわけではない。学習や実践方法でクラシック音楽とは大きく異なり、そして若者に圧倒的な支持を受けているひとつがポピュラー音楽である。本研究ではポピュラー音楽を Tagg (1982) の定義のひとつを援用し、「大規模な、社会文化的に同質的な場合が多い聴取集団に大量分配される音楽」とする。

Green (2002) はポピュラー音楽家への膨大なインタビューを元に、彼らの学習方法がクラシック音楽家のそれとは大きく異なることを明らかにしている。そこでは楽譜を中心に据えるクラシック音楽の「フォーマル」な学習形態に対して、学習対象の聴覚的な模倣を中心とすることにポピュラー音楽学習のひとつの特徴を見出している。このような学習は伝統的な学習環境の外で起こるという意味で「インフォーマルな音楽学習」と言われる。

これまでもたびたび音楽科教育におけるポピュラー音楽の扱いが議論されているように、若者とポピュラー音楽の間には強固な結びつきがある (坪能, 1988; 1991)。常にポピュラー音楽は若者を中心とした音楽的活動と消費の中心のひとつであったと言えよう。生涯音楽学習を見据えた音楽科教育のあるべき姿を議論する上で、ポピュラー音楽の存在は決して無視するわけにはいかない。

それでは「インフォーマル」な形態をとるポピュラー音楽学習において、未だに「フォーマル」な学習方法や「フォーマル」な音楽領域で用いら

れる作品教材を主体とする傾向にある音楽科教育は、どのような役割を果たしているのだろうか。そして、生涯音楽学習として多く選択されるポピュラー音楽の活動に対して、音楽科教育はどのような内容を備えているべきなのであろうか。本研究は余暇活動としてポピュラー音楽を学ぶアマチュア音楽家を対象に質問紙調査を実施し、彼らの現在の学習と活動の現状を把握すると共に、現在の活動に対する過去に受けた音楽科教育の有用性の現状と、彼らが音楽科教育に望むものを明らかにすることで、ポピュラー音楽を中心とした生涯音楽学習を見据えた音楽科教育の在り方について検討することを目的とする。

なお、本研究でいう音楽科教育は義務教育の範囲である小・中学校における音楽科教育を指す。またアマチュア音楽家とは、過去に大学や専門学校等の専門的な教育・訓練機関で音楽を専攻として学んだ経験をもたずに、余暇として音楽を演奏・学習している者を指す。

2. 質問紙調査の概要

2.1 調査対象者

余暇活動としてポピュラー音楽を演奏・学習している愛知県・大阪府・東京都・新潟県に在住の95名（男性45名、女性50名）。年齢は18～57歳（ $M=24.2$, $SD=8.8$ ）である。

2.2 質問項目と調査方法

質問は6つの大項目から構成されている。大項目は『対象者の現在の音楽活動の状況』を調べる項目と、『現在の音楽活動と過去に受けた音楽科教育との関連』を調べる項目に大別される。

『対象者の現在の音楽活動の状況』を調べる大項目としては「1. 音楽活動および学習を始めたきっかけ・目的」「2. 現在の音楽演奏活動の状況」「3. 今後の音楽活動および学習」がある。また『現在の音楽活動と過去に受けた音楽科教育との関連』を調べる大項目としては「4. 現在の音楽学習の状況」「5. 現在の音楽活動および学習と

音楽技能」「6. 現在の音楽活動および学習に対する音楽授業の影響と関連」がある。各大項目は複数の下位項目を含んでいる。紙面スペースの都合から、本稿では研究の目的に照らし合わせ必要な質問項目の結果のみを掲載した。

各質問項目とも、複数の回答項目から該当するものをチェック（場合によっては記述）し、回答項目で該当するものが無い場合には「その他」にチェックを入れ、その内容を記述する方法を採った。質問紙は各対象者に郵送もしくは手渡しによって配布および回収された。

3. 結果と考察

結果は質問項目ごとに集計した。なお、本調査は大まかな傾向を探ることが目的であるため、欠損が含まれるような回答でも全て有効回答として扱っている。

3.1 現在のライブ活動の状況

図1は対象者の現在の演奏活動（人前で演奏することを想定したライブやコンサート等）の状況についての集計結果である。ほとんどの者が人前で演奏を披露することを前提とした活動を行なっているようである。「どちらともいえない」を選択した者も「やりたいが、タイミングがつかめない」といった理由を挙げており、実質的には人前で演奏する活動を望んでいることが窺える。アマチュア音楽家のポピュラー音楽活動ではライブという演奏の披露が不可欠なものと言えるであろう。

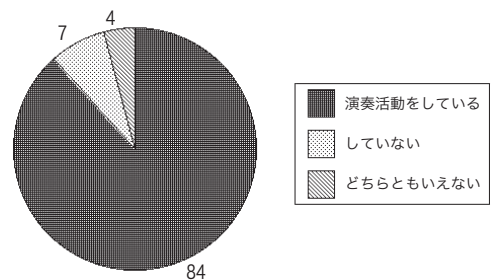


図1 現在の演奏活動の状況

3.2 演奏活動の形態

図2は対象者の演奏活動の形態についての集計結果である(複数選択可)。大多数の者が「グループ」による活動を行なっている。「ソロ」と回答した場合であっても、そのほとんどは「グループ」による活動も併せて回答していたことから、アマチュアポピュラー音楽家による活動の大部分はグループで実践されていることが理解できる。

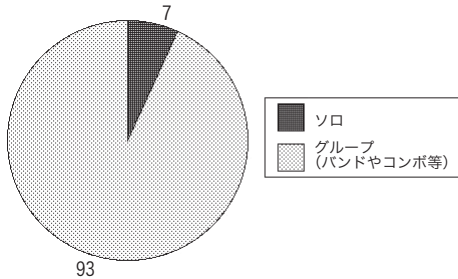


図2 演奏活動の形態

3.3 現在の音楽学習の有無

図3は対象者がライブ演奏とは別に行なっている音楽学習の有無についての集計結果である。「音楽学習をしている」と回答した者が大多数であることから、対象者の多くが普段から音楽の練習や学習を行なっていることがわかる。

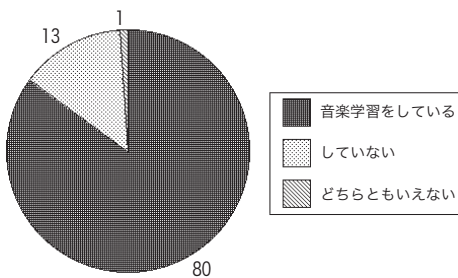


図3 ライブ演奏とは別に行なっている音楽学習の有無

3.4 音楽学習の内容

図4は3.3節で紹介した音楽学習の内容についての回答結果である(複数選択可)。

「演奏楽曲の練習」と「グループで併せる練習」が同数であることから、対象者が演奏楽曲を個人で練習し、さらにグループでアンサンブルとして

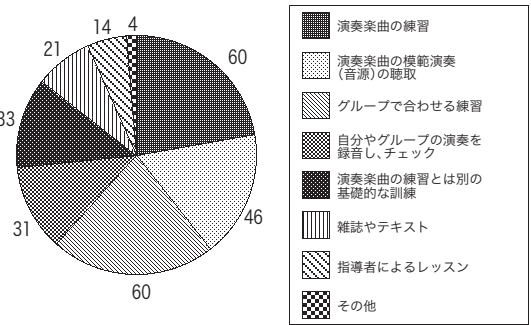


図4 音楽学習の内容

合わせる練習を多く行なっていることが示されている。3.1節で見たように、彼らの多くがグループとして人前での演奏を披露する機会を持っているが、これらの練習はそのために行なわれていると考えて良いであろう。

また「演奏楽曲の模範演奏(音源)の聴取」も比較的多い。これはGreen(2002)で指摘されている対象の聴覚的な模倣という学習方法を支持するものである。ポピュラー音楽学習における楽曲の微妙なニュアンスや音色などを耳によって把握・確認していく作業の重要性が本調査でも再確認されたと言える。

「自分やグループの演奏を録音しチェック」も比較的多い。これについては、近年の安価で高性能なICレコーダーやスマートフォン等の普及を背景要因として挙げることができよう。演奏と同時にその質を客観的に把握することは難しいため、より確実な演奏の改善を目指す上でこれは効果的な方法と思われる。また本稿では学習内容の記述結果を記載していないが、そこでスマートフォンのアプリを使用して楽曲の再生速度を低下させ、楽曲の聴覚的模倣を容易にしている旨の記述があったことも、現代ならではの学習方法として紹介しておきたい。

また「演奏楽曲の練習とは別の基礎的な訓練」でも比較的多くの回答が見られる。本稿では報告していないが、この回答を挙げた者は楽器の学習年数が比較的長くなる傾向があった。演奏を続ける中で、基礎的な訓練の重要性に気付いたのかも

しれない。

併せて触れておきたいのが「その他」を挙げた者の学習内容の記述で複数見られた「インターネット上の動画サイトの視聴」である。確かに音楽学習において映像がもたらす情報の効果は計り知れないものがある。音に加えて映像も提示されることで、さらに効率の良い学習環境を構築できると考えられる。上述のスマートフォンによるアプリ使用も含めて、現代におけるポピュラー音楽の学習ではテクノロジーを巧みに利用することもその特徴のひとつとして指摘できるであろう。

3.5 音楽学習の実践・考案に対して有益だったもの

図5は対象者が音楽学習を実践・考案するにあたって有益だったものについての回答結果である(複数選択可)。ここでも「CD等の音源」という回答が最も多くなっており、聴覚的模倣の重要性が裏付けられている。また同程度に有益と考えられているのが「友人や知人による助言」である。この点は、明確な指導者の立場にある人物が存在しないインフォーマルな音楽学習ならではの特徴であろう。

「楽譜」を挙げる回答が多いことも興味深い点である。聴覚的な模倣が学習の中心となるポピュラー音楽において、学習上の「楽譜」の存在はそれとは相容れない点であるように思えるが、今日では有名な楽曲であれば俗に「コピー譜」と呼ばれる楽譜を入手することができる。コピー譜によって聴覚的模倣の手間が省かれ、誰もが容易に楽曲を演奏できるようになった点で、その意義は大いに認められるところである。

逆に最も少ない回答は「小・中学校の音楽の授業」であった。全回答に占める割合の低さから見れば、音楽科教育はポピュラー音楽の学習においてそれほど有益とは見なされていないと考えられる。さらに本稿で記載はしていないが、「小・中学校の音楽の授業」を挙げた回答の理由として「基本的な楽譜の読み方」が有用であったとする意見が多かった。上述のように現代のポピュラー

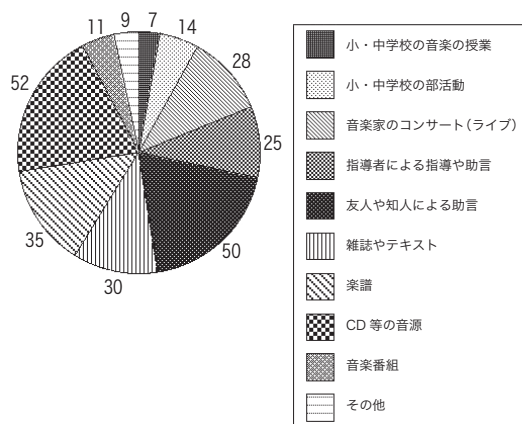


図5 音楽学習を実践・考案するにあたって有益だったもの

音楽学習では楽譜も多く使用されるため、読譜に必要な知識の伝授の点では音楽科教育が役に立っているとは言えるかもしれない。

3.6 音楽授業が現在の音楽活動に及ぼしている有用性の総合的評価

図6は小・中学校の音楽科の授業の内容が対象者の現在の音楽活動に及ぼしている有用性についての総合的な評価の集計結果である。「相当役に立っている」と「少しは役に立っている」を有用性を認める回答と考えれば、対象者の半数近くがポピュラー音楽活動における音楽科の学習の有用性を認めていることになる。逆に「あまり役に立っていない」と「ほとんど役に立っていない」を有用性を認めない回答と考えれば、有用性を認めない回答数は認める回答数よりも少ない。

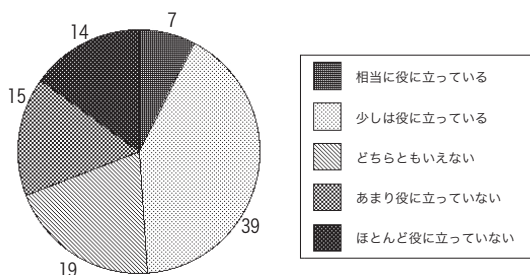


図6 小・中学校の音楽科の授業の内容が現在の音楽活動に及ぼしている有用性

この結果から、アマチュア音楽家のポピュラー音楽活動において音楽科の有用性がある程度は認められていると判断できるのであろうか。表1は図6の回答理由について「有用性を認める理由」「有用性を認めない理由」「どちらでもない理由」に分類したものである。「有用性を認める理由」を見ると、楽譜指導や音楽記号の理解を挙げる回答が多く見受けられる。「歌唱」「器楽」「鑑賞」など様々な活動を授業で行なっているにも関わらず、アマチュアのポピュラー音楽学習者にとって役に立っていると考えられている活動は、歌唱や器楽といった主たる活動ではなく楽譜を読むという手段なのである。

また「どちらでもない理由」では、興味や知識そのものの獲得という点では音楽科の授業を評価しているものの、演奏や練習といった実践的な部分ではそれほど有用性を認めていない回答が見られる。さらに「内容自体を覚えていない」という理由もいくつか挙げられている。もちろん、意識しない部分で授業が役立っていることもあると思われるが、授業内容が思い出せる形として残っていないというのは、音楽科教育の存在を否定することにもつながるといってかなり辛辣な意見と言えよう。つまり、「どちらでもない」という回答の中には、知識の獲得や興味・関心の喚起という点では音楽科教育を評価しているが、ポピュラー音楽活動の中心となる演奏に関わる部分では評価していない者が含まれているのである。

このように考えると、ポピュラー音楽学習者にとっての音楽科教育の有用性は、決して多くの者に認められているものではないことがわかる。

3.7 音楽授業で学習していれば現在の音楽活動にとって有益だったと思われる内容

図7は小・中学校の音楽の授業で、もし学習していれば対象者の現在の音楽活動にとって有益だったと思われる内容の集計結果である（選択肢から3つまで回答）。

各活動とも比較的満遍なく選択されている印象を受けるが、少ないのは「作品や音楽家等の知識

を含む音楽史」の活動である。また「音楽理論」についても回答が少なくなる傾向がある。逆に回答数が多かったものは「器楽や歌唱」「他人と合わせるアンサンブル」であった。このことから、ポピュラー音楽学習者は、知識の獲得よりも演奏に関連した実践的な技能を求める傾向にあることが理解できる。また「楽譜の読み書き」という回答が多くなっていることも、楽譜に基づく学習がアマチュア音楽家の中に浸透していることを示唆していると思われる。

さらに比較的多い回答が得られた活動として「音楽を学ぶ方法を体験する」がある。ポピュラー音楽学習では音楽の聴覚的模倣が中心となることは再三にわたり述べてきたが、その他にも多様な学習方法がある。学習者が自身にとって最適な学習方法を独自に考え出すことも、インフォーマルな音楽学習では重要と言えるであろう。しかし、白紙の状態から独自に学習方法を生み出すことは困難である。そのために、3.5節で見られたような「周囲からのアドバイス」が大きな意味を持つてくると思われる。すなわち、学習者は基本的な音楽の学習方法を知りたいことを望んでいるのである。この回答をした者は、授業として音楽学習

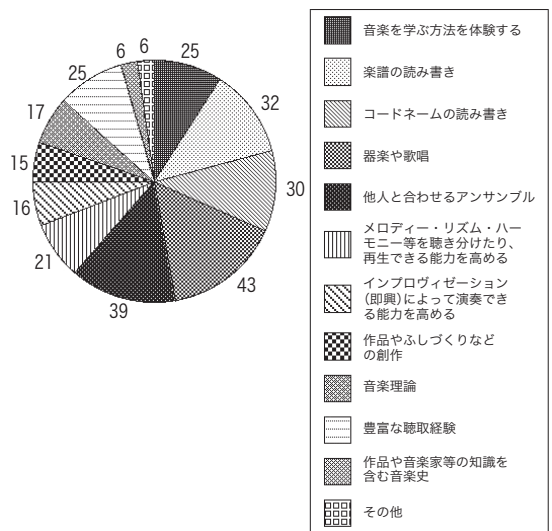


図7 小・中学校の音楽の授業で、もし学習していれば現在の音楽活動にとって有益だったと思われる内容

表1 小・中学校の音楽科の授業の内容が現在の音楽活動に及ぼしている有用性の判断理由

有用性を認める理由	どちらでもない理由	有用性を認めない理由
<ul style="list-style-type: none"> ・みんなでひとつの音楽を演奏するのは楽しいと気づけた。 ・音符や音楽記号の勉強ができた。 ・音符の意味が理解できた。 ・音符について理解できた。 ・楽譜など読めたりするから。 ・音符がスムーズに読めるようになった。 ・音符が読めるようになった。 ・音符についての理解が深まった。 ・音楽記号について理解できた。 ・音楽の知識は増えた。 ・音楽記号について理解できた。 ・音符が読めるようになった。 ・楽譜の読み方や歌を歌うときの声の出し方を学べたのが良かった。 ・音楽記号や音符を学んだのは役に立っているから。でも、リコーダーや箏を学んだり、ベートーヴェンについて学んで何になるのかとは思って音楽がより好きになった。 ・仲間と演奏できることに役立っている。 ・基礎的な知識や曲名、作曲者名は今でも頭に入っている。 ・様々なジャンルの音楽を聴くことは、家庭ではあまりできないから。 ・歌唱・演奏の基本は音楽の授業で習っているため、現在の音楽活動にも有効。 ・歌を歌うことが好きだと気付くことができた。 ・楽譜を読めるようになった。 ・音楽記号が読めるようになった。 ・複数名で合奏・アンサンブルをするなどの経験ができた。 ・楽譜の読み方や音楽に対する興味につながったと思う。 ・リズム感がついた。 ・音楽の楽しさを教えてくれた。 ・歌のテストなどで1人で大勢の前で歌う機会があって、それによって人前で歌うことができるようになった。 ・基礎的な知識が身についた。 ・楽譜が読めるためどんな曲でも演奏できるし、コーラスなどをする際に合唱で身につけた能力が生きていると思うから。 ・楽譜の記号など、習っていないと分からなかったと思います。 ・楽譜が読めると、とりあえず少しだけピアノが弾ける。 ・音楽に興味を持つきっかけに少なからずなったと思う。 ・基本的な音楽について知ることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽に興味を持つきっかけにはなかったと思うが、学習・練習面で役に立ったかどうかはわからない。 ・授業内容をそれほど覚えていない。 ・具体的な内容をほぼ覚えていない。 ・役立つものもあればそうじゃないものもある。 ・学習したこと自体はあまり使っていない（知識としては役立つが実用的ではない）。 ・音楽の知識は増えたが、実践的な演奏には役に立たなかった。 ・12年間ピアノを習っていたので、小中学校の頃の音楽の授業での経験が役立っているのか、ピアノを習っていたからそちらが役立っているのかよくわからない。 ・やっているジャンルが違う。 ・楽しかっただけ。 ・音楽はただの遊びではなく、人前で演奏したり、そういうちゃんとしたものだと自分で認識できるようになった。それが作用して高校で部活として音楽を選びました。 ・内容を覚えていない。 ・ギターをやっているが、譜面がTAB譜なので、五線を読む必要がない。 ・授業の内容がクラシックだったので、今やっている音楽とは別物である。 	<ul style="list-style-type: none"> ・幼少時はスポーツへの興味が強く、音楽に全く興味がなかった。 ・今やっているのは即興が中心の音楽であるが、小中学校のときは書かれたものを行うだけであつたので、そんなに役に立っているとは思えない。 ・使うときがない。 ・当時興味のある音楽ジャンルと授業内容が一致しなかったため、授業に興味を持てず学習しなかったので身につかなかつた。今思えば、勉強していれば役に立つこともあつたと思う。 ・小中学校の時に積極的に学ばず、知識がほとんどない。成人以降独学で得た知識などが現在の活動に活かされていると思う。 ・音楽教師の音楽観に馴染めなかったのではないかと思います。 ・個々によってやるべき事は必ず違うはずなのに、先生の言ったことを全員がただやるだけだから。おしつけていると思う。まあ、本当に音楽をしたい人は自分でやるからいいかもしれないが。 ・合唱の指揮、クラシック鑑賞が中心だったため。 ・初歩的すぎる。 ・その時に培った知識や感性などはおそらく部活動やピアノ教室の先生に影響を受けたと思うから。 ・小中学校の音楽の授業でやった音楽ジャンルと異なるものだから。 ・やりたいことと全く違う。 ・自分のやっている楽器はドラムであるし、楽譜は未だにほとんど読めないから。 ・授業の枠組みの中で言われてやっていたという感じであつた。今も役立っているのは、家で個人的にやっていた練習や独学による部分だと思う。 ・興味のない分野に関する授業の内容はあまり身につかなかつた。 ・音楽の授業で扱っていたのは主にクラシックや邦楽で、自分の音楽活動で扱うジャンルとは相容れる部分が少ない。 ・音楽の仕組みについての理解が進まなかったし、鑑賞で何を感じようが個人の勝手だと思っていました。結局、何をやっていたのかあまり記憶にも残っていません。 ・役に立っていると感じたことがない。

の多様な方法を経験しておくことで、将来音楽を独習していくための基本的な学習の枠組みを知っておきたいという思いがあるのではないだろうか。

4. 総合的な考察

本調査は回答者数も極めて少なく、対象者の年齢や居住地域の統制もなされていない。そのため、本調査の結果をポピュラー音楽を学ぶアマチュア音楽家の意見が強く反映されたものと捉えることはできない。しかし、その結果にはポピュラー音楽を中心とした生涯音楽学習を見据えた音楽科教育の在り方を考える上での示唆が少なからず存在しているように思われる。

まずポピュラー音楽を学ぶアマチュア音楽家は、程度の差こそあるものの、人前で演奏を披露する機会を持っており、そのために普段から学習を行なっていることが明らかとなった。そのような学習方法の実線・考案にあたって、最も有用であるのがCD等の演奏楽曲の音源の聴取であることが分かった。ここではGreen (2002) が指摘するように、インフォーマルな音楽学習において対象の聴覚的な模倣が重要であることが改めて確認された。

さらに、楽譜を有用とする意見も多く見受けられた。このことは、聴覚的模倣を中心とするインフォーマルな音楽学習に、フォーマルな音楽学習の方法が取り入れられていることを示唆している。一方で、音楽科教育を有用とする回答は最も少なく、ポピュラー音楽を学ぶアマチュア音楽家が音楽科教育の経験を学習上それほど有益だと感じていないことが見出された。また音楽科教育を有用とする回答の理由としては「楽譜の読み方」が多く挙げられていた。

続いて、普段の学習も含めた現在の音楽活動に対する音楽科教育の有用性の総合評価では、約半数が音楽科教育の学習内容の有用性を認めていたものの、その理由としては「楽譜の読み方」の知識の獲得が多く挙げられていた。

以上のことから、ポピュラー音楽学習においてアマチュア音楽家が音楽科教育の価値を最も見出している点は読譜技能の学習であることがわかる。つまり、インフォーマルな音楽学習にフォーマルな方法論が取り入れられ、学習者はそのフォーマルな音楽学習で中心となる技能について音楽科教育の有用性を認めているのである。このことは、クラシック音楽と同様にポピュラー音楽を楽譜から演奏することによって、多くのアマチュア音楽家が活動していることを示唆している。

ポピュラー音楽学習において、やはり本質的に重要となるのは楽譜ではなく聴覚的模倣であろう。それによって、ポピュラー音楽で重要となる技能が獲得されるからである。しかし、それは同時にある程度長期にわたる訓練を要求する過酷なものでもある。おそらく、多くのアマチュア音楽家はポピュラー音楽学習の本質にせまるような過酷な訓練を望んでいるわけではないのであろう。確かに音楽科教育の中で学んできたフォーマルな音楽学習の方法論によって、ポピュラー音楽にも「ある程度」の水準まではアプローチすることが可能である。3.7節の結果で「楽譜の読み書き」という回答が比較的多いことも、その表れと考えることができる。そのような形で音楽活動を楽しむアマチュア音楽家も少なからず存在するという点で、フォーマルな音楽を中心に音楽科教育が実践してきた学習にも一定の評価が与えられるべきであろう。

しかしながら、少しずつであっても上達を目指してこそ、より充実した生涯音楽学習が実現されることも事実である。またアマチュア音楽家の中には、ポピュラー音楽の演奏者として、より本格的な活動を望むものも少なからず存在するはずである。そのような少しでもポピュラー音楽の本質的な学習を望む者にとっては、音楽科教育の有用性は極めて低いものとなろう。本調査で見られた音楽科教育の有用性を認めない類の回答は、学習者のそのような意図が反映されたように思われる。

また、小・中学校の音楽の授業でもし学習して

いれば現在の音楽活動にとって有益だったと思われる内容の調査結果では、「器楽や歌唱」「他人と合わせるアンサンブル」といった演奏を中心とした実践的技能を求める回答が多く寄せられている。このことは、多くのアマチュア音楽家がグループとしてポピュラー音楽の演奏に必要な技能や体験を音楽科教育に望んでいることを示唆している。しかし、歌唱や器楽は音楽科教育の中心的活動であり、それらの多くはアンサンブル形態によって実践されている。それにも関わらず、なぜポピュラー音楽を学習するアマチュア音楽家はアンサンブルを中心とした歌唱や器楽体験を望んでいるのであろうか。おそらく、そこにはアンサンブルの規模と音楽様式の問題が潜んでいるように思われる。

確かに音楽科教育ではアンサンブル活動は多いが、基本的にそれらはクラス全員が参加して行われる大規模なものである。他方、ポピュラー音楽のグループ演奏はほとんどが3～5名程度の小規模アンサンブルである。すなわち、音楽科教育におけるアンサンブルとポピュラー音楽のアンサンブルでは、参加する人数の規模が大きく異なるのである。一般的にアンサンブルでは参加人数が多いほど個々の演奏者の責任は軽くなる。例えば、複数人でひとつのパートを担当する合唱では1人がミスを行っても他者がそこを補うことが可能であり、ミス自体も大きく目立つことはない。しかし基本的に1人でひとつのパートを担当するポピュラー音楽では、ミスはそのパートの欠損につながるため認知されやすく、さらにその影響がアンサンブル全体に及びやすい。つまり音楽科教育のアンサンブルと比較すると、ポピュラー音楽では個々が果たすべき責任はより大きいと考えられる。しかし、責任の大きさに比例して得られる充足感もまた大きいものである。したがって、音楽科教育で少人数によるアンサンブル経験をより多く取り入れていくことで、より高い演奏技能と充足感の獲得というポピュラー音楽の生涯学習に対するより確実な土台と契機を形成できる可能性がある。

さらに音楽科教育で歌唱や器楽が行なわれる音楽様式の問題も指摘できよう。ポピュラー音楽の特徴のひとつはタイトなテンポとリズム感である。基本的に一定のテンポを維持することが必要であり、その厳格なテンポの中で俗にグルーブと呼ばれる心地良いリズムを出すことが求められる。しかし清水（1986）が指摘するように、クラシック音楽を中心に学んできた者にとって、ポピュラー音楽で求められるテンポとリズム感の獲得には困難を伴う場合が多い。なぜならクラシック音楽ではテンポの自由な伸縮による音楽構造の表現がひとつの鍵となるからである。つまり音楽では不可欠な「時間」という要素に関して、クラシックとポピュラー音楽ではその表現方法が大きく異なると言える。

タイトなテンポとリズム感を持って演奏する技能の獲得には、当然ながらポピュラー音楽の様式上で歌唱や器楽活動を行なうことが効果的である。おそらくポピュラー音楽を学習するアマチュア音楽家はこの点を音楽科教育に求めているものと想像される。フォーマルな音楽学習が主となる音楽科教育の歌唱や器楽は、どうしてもクラシック音楽の様式を中心に実践される傾向にある。ポピュラー音楽で活用できる基本的な演奏技能を身につけるために、その文脈の中での演奏経験を持つことができるような場も音楽科教育で積極的に設定されるべきであろう。

加えて、音楽科教育に望むこととして「音楽を学ぶ方法を体験する」ことが少なからず挙げられていたことも印象的である。楽譜だけに依存しない多様な音楽学習の方法を音楽科教育の中で経験することが、児童・生徒たちの将来の自立的で継続的な音楽学習へつながるものと想像される。

本調査ではポピュラー音楽学習に対する音楽科教育の貢献の状況を学習者の意識から探したが、多くのポピュラー音楽学習者が音楽科教育の有用性をその活動の中に見出しているとは言えないことが明らかとなった。もちろん学習者が意識しない部分で音楽科教育が役立っている部分も間違いなく存在するはずである。しかし、生涯音楽学習

のための出発点として音楽教育を位置付けるのであれば、学習者にとって明確な形でその効用が実感されることが理想であろう。確かにクラシックとポピュラー音楽は本質的な学習方法で大きく異なるものの、音楽構造という点では多くを共有している。このことを考えれば、現在の音楽科教育の範疇でも、生涯にわたるより充実したポピュラー音楽学習実現のための活動を組み込むことも可能なはずである。そのための具体的な方法論とプログラムについて検討していくことも今後の課題であろう。

謝辞

本研究の調査にあたって、回答にご協力頂いた皆様に心より感謝の意を申し上げます。

本研究は科学研究費補助金基盤研究(B)課題番号23330227「人間発達の保証をめざす教育福祉ガバナンスと教育委員会改革に関する理論と実践の研究」によって実施された研究の一部である。

参考・引用文献

Green, L. (2002). How popular musicians learn. Ashgate.
Tagg, P. (1982). Analysing popular music: theory, method and

practice. 三井徹編訳, ポピュラー音楽の研究, 音楽之友社.
Wright, R., and Kanellopoulos, P. (2010). Informal Music learning, improvisation and teacher education. *British Journal of Music Education*, 27(1), 71-87.
尾見敦子. (1982). 生涯教育と音楽学習. 季刊音楽教育研究, 31. pp. 79-87.
清水信之. (1986). キーボード講座 第8回. シンプジャーナル1986年3月号. 自由国民社.
杉江淑子. (2009). 生涯学習社会における音楽教育研究. 日本音楽教育学会編, 音楽教育学の未来. pp. 252-265.
高萩保治. (2000). 生涯学習の一環としての音楽教育. 日本音楽教育学会編, 音楽教育学研究3. 音楽之友社.
高萩保治, 中嶋恒雄. (2000). 音楽の生涯学習. 理論と実際. 玉川大学出版部.
玉木裕. (2008). 生涯学習の視点から見る音楽科教育. 北方圏学術情報センター年報, 1. pp. 69-81.
玉木裕. (2009). 音楽振興法からみる高等学校学習指導要領の変遷. 北方圏学術情報センター年報, 2. pp. 73-81.
坪能由紀子. (1988). ポピュラー音楽と若者のイメージ. 季刊音楽教育研究, 54. pp. 14-22.
坪能由紀子. (1991). ポピュラー音楽教材化の現状と問題. 音楽教育学の展望II上. 音楽之友社.
法岡淑子. (1995). 成人のアマチュア音楽活動と学校音楽科教育との関連に関する調査研究. 科学研究補助金研究成果報告書.
丸林実千代. (1999). 生涯音楽学習入門. 音楽之友社.